

## 特1講

# 教育改革とその思想

小玉重夫（東京大学大学院教授）

皆さん、こんにちは、私は東京大学の小玉と申します。本日は岐阜女子大学主催の講習ということでお話をさせていただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

この講習は教育の最新事情と教育の在り方というテーマで行なっていきたいと思います。その第1講ということで私の話は教育改革とその思想ということになります。流れといたしましては4部構成で、学習指導要領の改訂の話と、それから子供の探究というテーマ、そしてツリーからリゾームへ、最後に研究・教育から「探究→研究」の時代へという流れでお話をしたいというふうに思います。

## 1. 学習指導要領の改訂とカリキュラム・イノベーション

最初に学習指導要領の改訂とカリキュラム・イノベーションということでお話をさせていただきたいと思います。今この問題を考える際に一つ前提となっているのは大学入試改革論議の動向、報道等でもいろいろ問題になっておりますけれども、政府の教育再生実行会議が、7年前ぐらいから大学入試の在り方について検討を始めまして、その中で新しい今のセンター試験に、大学入試センター試験に代わる新しい試験制度ができないかという議論が行われたということがあります。

それを受けて翌年の2014年に出された中教審の答申、それから2016年に出た高大接続システム改革会議の最終報告というもののの中で、現在に至る方向性が次のような形で出されるようになります。

高等学校教育については、「生徒が国家と社会の形成者となるための教養と行動規範を身につけるとともに、自分の夢や目標を持って主体的に学ぶことのできる環境を整備する。そのために高大接続改革と歩調を合わせて学習指導要領を抜本的に見直し、育成すべき資質・能力の観点からその構造、目標や内容を見直すとともに、課題の発見と解決に向けた主体的・協働的な学習方法であるアクティブ・ラーニングへの飛躍的充実を図る。」と報告されています。



新 e-Learning  
システム



新しい時代にふ  
さわしい高大接  
続の実現に向け  
た高等学校教  
育、大学教育、  
大学入学者選抜  
の一体的改革に  
ついて



高大接続システ  
ム改革会議「最  
終報告」

また、教育の質の確保・向上を図り、生徒の学習改善に役立てるため新テスト「高等学校基礎学力テスト（仮称）」の導入があります。この新テスト「高等学校基礎学力テスト（仮称）」の導入についてはその後の議論の中で若干議論の変遷がありましたけれども、ただ少なくとも昨年まで行われていた大学入試センター試験を廃止して、それに代わる高等学校の学習の成果の評価の手法及び大学入試の在り方の改革をすることになっています。そうすることで高等学校の教育の在り方を変える、ひいては高等学校だけではなくて初等中等教育と大学との接続の環境を見直していくという、そういう方向性が打ち出されることになって、その際のキー概念がここに書いてある主体的・協働的な学習方法であるアクティブ・ラーニングへの飛躍的充実を図るということになります。

このアクティブ・ラーニングという言葉、それから主体的・協働的な学習方法という言葉、ここが基本的に重要なポイントになって、それによって初等中等教育とそれから大学以降の高等教育との間の段差をなくしていくという。大学入試というのがあったために高等学校までは受験勉強する。そして、大学に入ってから研究するという、高校までは受験勉強、大学に入ってから研究という、この高校までの学習と大学入学以降の研究というのがこれまでは切り離されて、大学入試というスクリーニングの手法が壁となって切り離されていて、大学からは研究するけれども高校までは受験勉強するという形で、そうすると高校卒業してから大学に入るまでの間のつながりが滑らかにつながっていかないという問題があり、これが高等学校卒業後の若い人たちの意識や学習・研究の阻害要因になっているのではないかという問題意識から大学入試制度を変えるということになりました。これが2020年になりますけれども、「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」、これが大学入試センター試験に代わる大学入学希望者共通テストということで、これが2021年1月から実施されるということが現在決まっています。

そしてこういった大学入試制度の改革に合わせる形で幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の学習指導要領の改革というのが打ち出されていきます。これはその方向性を示した2016年の答申ですけれども、ポイントは学力の3要素ということで、今まではオレンジと青と緑で描いた、3色で描いたこの3つの中でいうと、青い色の知識・技能の習得というところに特化した形で、これまでは学力というのを考えてきたけれども、これからはオレンジの学びに向かう力・人間性の涵養、それから緑の思考力・判断力・表現力、これを組み合わせた三位一体のものとして学力の3要素というのを、より広く学力を考えていこうとしています。

そのためには、これまでのように教師が受動的に知識を生徒に対して教えるという形ではなくて、主体的で対話的な深い学びを行う、主体的でありかつ対話的でありかつ深い学び、これを（「アクティブ・ラーニング」）と書いていますけれども、アクティブ・ラーニングという視点から学習過程を改善し、それによって、初等中等教育はアクティブ・ラーニングで、大学でもアクティブ・ラーニングという形で、このアクティブ・ラーニングという観点で初等中等教育と高等教育を一貫させることによって、よりスムーズな、滑らかな教育課程の改善につながるようにしようということが新しい学習指導要領ではうたわれております。

したがってこれはこれまでの教員の実践的指導力の中で求められていた枠組みを大きく変えていくものになりますので、非常に重要な変化になります。

そしてそのための学習指導要領が中心にあり、社会に開かれた教育課程ということが言われました。つまりカリキュラムそのものを社会に開かれたものにしていこうという方向性です。

そこで、この社会に開かれた教育課程という言葉はなかなか一言で言われてもぴんとこない部分もあると思うんですけども、私たち東京大学の研究グループが数年前に出した『カリキュラム・イノベーション』という本がありまして、そこで、これは文部科学省の新しい学習指導要領の話とは、全く独立して研究を進めてきて、数年前にその成果をこの『カリキュラム・イノベーション』という本として出したのですが、今、文部科学省が進めている新しい学習指導要領の社会に開かれた教育課程という話と結果的にかなり近いものが出ていますので、ちょっと私たちの研究の内容を併せて紹介させていただきたいと思います。

これは、この社会に開かれた教育課程というのはカリキュラム・イノベーションなんだ、カリキュラムをイノベーションしていくことなんだということで、左と右に図が描いてあります、左側が従来の図です。

右側がカリキュラム・イノベーションによって革新された図で、文部科学省でいうところの社会に開かれた教育課程ということになります。これまではアカデミズム、つまり大学を中心とした研究機関で学問が生産されて、その学問が高等教育から初等中等教育、学校教育へと下ろされていく、学習指導要領という形で下ろされていくという上意下達型の、あるいは垂直統合型と言ってもいいんですけども、縦系列で上から下に下りてくるという、そういう形でカリキュラムが決まっておりました。



カリキュラ  
ム・イノベー  
ション～新し  
い学びの創造  
へ向けて～

従って、既存の教科というものも、例えば数学であれば数学会がありますし、地理であれば地理学会があります、それから歴史であれば歴史学会がありますというように、英語であれば英語学会があります、このように親学会があって、アカデミズム、研究機関で研究されて生み出されてくる学問の成果というものを学習指導要領の内容にして下に下ろしていくという、こういう形でこれまでは学校教育のカリキュラムというのはつくられていました。そうではなくて学校と社会とを横でつないでいく、自立分散型ないしはリゾーム型というふうに呼んでもいいとは思っているんですけれども、横でつないでいく、学校教育を通して生徒がどういう人間として社会に出ていくのかということ、市民として、自立した市民を社会に送り出すということが学校教育の役割ですから、その学校教育の役割を円滑にさせるためのカリキュラムなわけですから、カリキュラムそのものが社会と横でつながっていくという、そういうカリキュラムになっていかなきゃいけないと考えます。

何のためのカリキュラムかという、それは科学を教えるためというよりはむしろ市民を社会に送り出すためのカリキュラムである、そういう形にカリキュラムの構造そのものを変えていくということはこの本の中で書いておきまして、かなりそれにほぼ符合することが学習指導要領の改訂で行われているという流れになっておりますので、初等中等教育における授業方法や実践的な指導の在り方が非常に大きく切り替わっていく時代に入っているということになります。

それを端的に言うならば、先ほどアクティブ・ラーニングという言い方を言いましたけれども、もう一つ、アクティブ・ラーニングの中で対話的で深い学びというのは、この深い学びという部分に関連しますけれども、これからのアクティブ・ラーニング、深い学びというのは、学習というよりはむしろ探求なのではないかということで、探求という言葉を使うことが非常に増えてきているということです。

例えば学習指導要領で言いますと、高等学校については総合的な学習の時間という名称がなくなりまして、総合的な探究の時間、探求という言葉に置き換わっています。

この辺りにかなり象徴的に示されているように、学習ではなくて探求なんだということが言われるようになってきています。従って、実際に幾つかの研究学校ではこういった探究的な学びについての実践的な研究活動がもう既に進んでおります。

自分自身が関わったものに限定させていただきますと、後でまた例に出しますが、お茶の水女子大学の附属の小学校が、「てつがく創造活動」という



お茶の水女子大学附属  
小学校

教科を新しくつくって、これは従来の道徳の時間とそれから総合的な学習の時間、この道徳の時間と総合的な学習の時間を組み合わせたものとして、「てつがく創造活動」という時間をつくって、そこで哲学の教育と、子供のための哲学教育と、それから総合学習におけるプロジェクトベースの探究活動、これをミックスさせたものに取り組もうとしています。

それから東京都の品川区の市民科というのは、これはもっと早い段階からかなりつくられていまして、私は経済産業省のシティズンシップ教育宣言というのに2000年代の初頭にちょっと関わったことがあるんですけど、そこで当時、品川区の教育長だった若月（秀夫）さんと御一緒させていただきました、シティズンシップ教育というのを中心にして市民性教育ですね、市民を育てるという形でカリキュラムを変えていくということで、品川区の場合にはそれを市民科という言い方で進めておりまして、これもお茶大の附属小とちょっと似ている部分もあるんですけども、道徳の時間とそれから総合的な学習の時間とそれから特別活動、児童会とか行事とかホームルーム、学級活動のような、ああいう特別活動、この特別活動、総合学習それから道徳、この3つを組み合わせで市民科という教科にして運営しています。

それから私自身が今勤務している東大の中には附属の中等教育学校があって、数年前に私も校長をしていた学校なんですけれども、そこは研究開発の中で探求的市民科というのをつくって、これも総合的な学習の時間を中心的に読み替えてこういう名前にしているんですけれども、探究的市民科という名前にして研究を進めています。こういった幾つかの取組に共通して見られるのは、学習ではなくて探求なんだという視点ですね。それが強調されているということです。

探求という最近話題になったのは、将棋の藤井聡太さんが自分の好きな言葉ということで探求という言葉が最近提示されていることが多いわけなんですけど、彼は名古屋大学の附属の中等教育学校、今は高校生だと思いますけれども、名古屋大学の附属に彼は在籍しておりますので、名古屋大学の附属も探求ということの研究テーマに掲げて実践活動を進めている、そういう彼を取り巻く環境の中で彼自身も探求という言葉に非常に引かれていったという経緯があるのではないかと想像できます。それから今のこの探究という言葉が一つの教育改革を貫く重要なキーワードになっているということを表す象徴的な例として紹介させていただきました。



新しい学習

「市民科」

そしてもう一つ、教育改革の動向を考える上で重要なのは、こういったアクティブ・ラーニングそして探究そして高大接続改革というこの一連の改革の動きというのは、18歳を大人にしていく、市民にしていくという、そういう社会全体の流れの一環であると、そこにも同時に注目しておく必要があるということで、2016年に選挙権年齢が18歳以上に引き下げられました。このことを受けて学校教育でも主権者教育という形で学校のカリキュラムをより主権者教育を実質的なものにしていく方向に変えていこうという動きが強まっています。

この主権者教育というのはシティズンシップ教育の中の一環なんです。政治的な市民を育てる教育ですね。政治的な市民を育てる教育としてのシティズンシップ教育の一環として主権者教育というのがあるわけですが、その主権者教育の協調というのがこの高大接続改革とそれからアクティブ・ラーニング、そして探究的な活動の重要性ということの流れの一環として近年強調されてきているということになります。主権者教育とか政治教育というと社会科の先生方にとっては非常に喫緊の問題として意識されることが多いと思うんですが、むしろ近年の主権者教育の中で協調されているのは、社会科だけに限定されないで広く学校全体で主権者教育に取り組んでいくということが強調されるようになってきています。

そこで、学校全体で主権者教育に取り組むということは、高等学校であれば教科の壁を越えて全ての先生が取り組むということになりますし、学校改定で言えば幼稚園から小学校、中学校、高等学校まで一貫して主権者教育をカリキュラムの構成要素として位置づけていくということにもなります。

また、この主権者教育の背景になっている、これは私自身が参加した委員会なんですけれども、総務省の中に「常時啓発事業のあり方等研究会」というのが2010年から2011年にかけて設置され、その中でこの主権者教育の重要性ということについての報告を出しました。そこでキーワードになっているのが社会参加の促進ということと政治的リテラシーの向上というこの2つになります。特にこの政治的リテラシーというのが非常に重要なポイントで、これを育むことを行うためには、最終的には学習指導要領で政治教育をさらに充実させて、学校教育のカリキュラムにそれをしっかりと位置づけることが重要だという報告が出ています。

これを受ける形でその後文部科学省と総務省の間での協議が進みまして、それで、まだこの報告が出た時点では選挙権年齢は18歳にまだなっていなかったのですが、2016年に選挙権年齢が18歳に引き下げられたのを受けて、本格的に主権者教育というものを学校教育で展開していこうという動きも強まってい



「常時啓発事業のあり方等研究会」最終報告書

きます。その際に2011年に出た常時啓発事業のあり方等研究会の最終報告というものが生かされているということになりまして、実質的にこの最終的な次期学習指導要領での政治教育の充実ということが、現在の新しい学習指導要領でいうと公共という、社会科の公民の中に公共という科目が新しくできましたけれども、そこに実際には反映されていますし、それから広い意味で言えば総合的な探究の時間というのもその中の一環として位置づけることができるんじゃないかというふうに考えています。

私自身は今、岐阜女子大学の松川（禮子）学長とも一緒に文部科学省の主権者教育推進会議の委員をやらせていただいております、そこで、文部科学省の中でこの主権者教育をいかに充実させていくのかということについての議論を進めているところでありまして、これについては文部科学省の、主権者教育推進会議のウェブサイトのほうにも内容が、議事録配付資料が逐次上がっておりますので、関心のある方はそちらのほうもぜひ御覧いただければというふうに思います。

そして政治的リテラシーの向上という、ここの部分は何から来ているかというと、イギリスのシティズンシップ教育の考え方から来ていまして、政治というのは物事が対立していて異なる価値観が存在しているときに政治というのは始まるのです。従って、物事が対立し、あるいは異なる価値観が存在しているときに、そこには論争が発生するわけなので、論争的な問題をどうやって理解するかというところに政治的リテラシーの核心があるんだということ。従って、政治的リテラシーというのは政治的教養とか政治的判断力というふうに読み替えてもいいものですけれども、この政治的リテラシー、政治的教養というのは単に政治のことをよく知っているということではなくて、物事が対立しているときにその論点、争点は何なのかというところを理解することが政治的リテラシーなんだと考えています。

従って、政治的中立性ということで政治のことを学校で扱わないことが中立性なんだというふうにこれまで捉えられてきた向きもあるのですが、政治的リテラシーというものを育むためには、物事が対立している論争的な状況にあるということ Avoiding を避けて通るのではなくて、むしろそれ自体を正面に掲げることで本当の意味での政治的中立性というのが確保されるということです。

例えば今コロナ禍で、様々な社会問題が発生している中で、例えばGo To トラベルとかGo To Eatのような政策を推進していることが良いか悪いかという、そういう、例えばこれは論争に、政策的には国会の中でも論争になっています。例えばそういう問題、あるいはコロナの問題を解決していくために、より生活を



今後の主権者  
教育の推進に  
向けて（最終  
報告）

守るという方向でやるのか、それとも経済活動を回していくのかという方向でやるのかという、そのことをめぐる、外出禁止の措置をどのくらい徹底するのかとか、そういうことをめぐっても問題が、政策、日常的に日々、国会あるいは新聞紙上でも論争は行われています。

そういう問題も広い意味での政治問題になるわけですが、議論が分かれている問題、意見が分かれている問題が世の中に存在しているときに、何でそれが分かれているのか、争点がどこにあるのか、そこを避けないで正面から位置づけることが重要です。それこそが真の意味での中立性なのであって、今生々しく政治的に争われているのが、生々しいから、教育にはなじまないからこれはちょっと避けておこうという、これは本当の意味での政治的リテラシーの涵養にはならないということです。そういう考え方この政治的リテラシーという考え方の中で言われています。

そうしますと政治教育というものの在り方も大きく変わってきておりまして、文部省が1969年に出した通知の中で、具体的な政治的事象は十分に注意して扱ってくださいという通達を出したんですけども、当時、今から50年前ですが、50年前の高校というのはまだ学生運動が非常に盛んであった時代で、高校の中にも学生運動が広がっていったような状況がありまして、高校生が非常に元気で活発だったわけです。政治的にも元気で活発だった時代ですが、その中で一部の高校生が少し突っ走って、学校の授業を妨害したりとか学校の設備を破壊したりみたいなことがあったりもしたということもありまして、そういうことを受けて50年前の1969年に具体的な政治的な事象は取扱いに注意してくださいという通知を出したんですね。こういった通知もあって生々しい政治問題というのはちょっと学校教育にはなじまないねという空気というか雰囲気为学校現場に急速に拡大していく一つの要因にもなっていたんですけども、2015年に選挙権年齢が18歳に引き下げられたということを受けて、この69年の通知が廃止されて新しい通知が2015年に出まして、そこでは180度違う内容になっています。現実の具体的な政治的事象を取り扱うことが重要なので、むしろそれを積極的にやってくださいという形で、現実に行われている生々しい政治というものを扱うことが重要ですよというふうに変わっていったという変化、これは180度の大きな転換で、こういった変化は現実の社会や政治と学校との関係の変化ということとも関連しますし、先ほど来言っている探究的な学び、そしてアクティブ・ラーニングという学校教育における教育の在り方そのものを変えていくということの中で、社会と学校との関係をより横でつないでいくような教育というものが重要なんじゃないか、これもまた一つの社会に開かれた教育課程ということの



中の一環として位置づけることができます。

それでは具体的に探求というものはどういうふうに行われるのかということを考えてみたいと思います。探求というのはそもそも何かということですが、これは考えることだという、シンキングですね。クリティカル・シンキングということが言われていますけれども、考えることなんだと。じゃあ考えることというのは何なのかというと、それは問題に直面したときにその問題を解くのではなくて問題を考えることだということですね。solve the problem, 問題を解くのではなくthink about the problem, 問題を考える。この問題を解くということと問題を考えるということの間に存在する違いというのは何かというと、solve, 解くという考え方を前提にすると、どこかに答えがあるということが前提になるわけです。

だから答えを見つけるために問題と向き合うということになるんですけども、問題について考えるというふうになると、先ほどの論争的な問題というのはまさにそうですけれども、コロナ禍で経済活動とそれから国民の健康安全維持と、どちらを、両立させるかという例えば問題があったとして、それも答えが1つではないわけですね。だからこそ論争がそこで発生する、政治問題になるわけですが、そういう答えが1つではない問題は、解くというよりはむしろ考えるということ、正解が存在しない問題なので考えるということが重要になってくるわけで、探求というのはまさに正解が存在しない問題を考えるということになります。

## 2. 軌道からそれる子どもの探求

これまでの学校教育はどちらかといえば、まあ両方やってきたんですけども、やっぱり議論の中心は受験というのがどうしてもありますので、そこに向けてより効果のある学習成果を求めますので、前者の問題を解くというところになり比重を置いた教育が行われてきたわけですが、それを、問題を考えるという方向に、つまり答えが1つではない正解のない問題にいかに向き合うのかというところにかにシフトチェンジしていくのか、ここが探求ということを考える際の重要なポイントになってくるわけです。

そこで、ちょっと一つ例を挙げて考えてみたいと思うんですけども、昔、板倉聖宣先生という理科教育で非常に著名な研究者がいて、仮説実験授業というのを展開していた人ですが、この板倉さんが言った言葉で、科学というのは実践的な課題を明確に持てば必ず解けるんだと。更に、解ける問題を解くのが科学なんだと。それが僕の言っている科学の定義なんだと。だから自分で解け



板倉 聖宣 (いたくら きよのぶ)

る問題、そして根本的な問題、それを探してきてそれを解かせるというのが科学の基本的な態度なんだということを、それを養うのが仮説実験授業ですということとを板倉さんが言っていて、こういう考え方が高度成長期の1960年代を中心とした日本の教育の中では割とメインの、メインストリーム、支配的な考え方であったというものです。

問題を解くという考え方ですね。ただ当時もう既にこういう板倉さんのような方に対しては批判も出ておりまして、例えばこれは戸倉美都子さんという早く亡くなられたんですけども非常に優秀な生物学者で、板倉さんの仮説実験授業の影響を受けた学校で理科の授業なんかをやっていた先生なんですけれども、その戸倉さんが当時板倉さんの議論をちょっと批判していて言っている文章です。

「正解を見つけて正解に向かって突き進んでいく科学の在り方というのは、いわば対象に対して最短距離を歩くような科学の在り方である」。対象に対して最短距離を歩く、あるいは「目的があって、ものが意識に介入できる」つまり物に狙いを定めて、その狙いを定めたものをゲットするというのが科学の基本的な考え方だということを板倉さんの仮説実験授業では強調しているわけですけども、それは非常に男性的な思考だと戸倉さんは言っています。

例えばデパートで食品売場に行ったときに、普通、男の人というのは買いたいものがまずあればその目的物に真っすぐに向かう、最短距離でそれを買おうとする、なるべく短時間で自分の目的を済まそうとする。だけれども女性は、戸倉さんに言わせれば、女性は目移りをする。デパートに行くと最初におもうと思っていたものではなくていろいろと、買いたいものがいろいろ出てきて目的物が霧散して、いろんなところを歩き回るというんです。

そこで、探求ということを考えるときにはこの後者のような、つまり目的物が霧散してあれこれと歩き回るような、そういう考え方を、これを考えることが重要で、それはつまり自然科学の法則が他の可能性の拒否の上に成立しているような、そういう科学の在り方では駄目なんじゃないかという。いろいろな可能性というものを、つまりいろいろな答えの可能性というものを見据えながら物事の考えを深めていくという、そういう考え方をしていくということが重要で、目的に向かって最短距離で歩くという考え方をしている限りでは、そういう物事に対する探究的な態度というのは深まっていけないんじゃないかという、そういったことを戸倉さんは、これは1969年なので板倉さんが活躍しているほぼ同時代なんですけれども、そのとき板倉さんを批判して言っています。こういう考え方がある意味の探求の短所になっているというふうに言えるのではないかというふうに

思います。

そこで、先ほど紹介させていただいたお茶の水女子大の附属小学校で報告されている実践報告事例を紹介させていただきたいのですけれども、お茶大の附属小学校では、「てつがく創造活動」という時間をつくって、哲学の時間とそれからプロジェクト学習の総合学習の時間を組み合わせて1つの時間をつくってそこで実践をしているのですけれども、小学校5年生のプロジェクト活動の中で、あるグループがその釣りについて興味があるということで魚釣りに出かけたのですけれども、魚を釣るという行為に対してグループのメンバーが達成感や充実感を得ることがなかなかできなくて、活動に迷いが出てきた。そこで、試行錯誤しながら活動していく中で、化石の採取に行くということに途中から目的が変わったということが報告されております。

この振り返りの中で書かれてあるのは、自分たちの活動や興味をもう一度見つめ直して軌道を修正するという、これは今までの創造活動の中では起こらなかったのですけれども、お茶大の附属では数年前から「てつがく創造活動」という時間をつくりまして、物を考えるということをやろうになったため、哲学という経験が加わることで立ち止まってもう一回考えてみる、それを通して当初の軌道を修正して別の課題を見つけ出すという、そういうことについて対話を通して共通理解を取りながら、活動の方針や内容やゴールを絶えず変更していくという姿が子供たちの中に見られるようになったという、そういうことが、当初は釣りというのを目的にしてプロジェクト学習をしていたあるグループが、途中から化石の採取に変わったという例からこういう振り返りをしています。

それから同じく小学校5年生で別のグループなんですけれども、プロジェクト学習の中で日本人の“おもてなし”をテーマにしてプロジェクトを進めていったグループがありまして、9月に羽田空港に出かけて外国人観光客から見た日本の空港についての見え方を調査したところ、日本人の“おもてなし”の課題を見つけようというのが本来の目的であったわけですが、いざ空港から戻ってくると次は成田空港に行こうという。つまり外国人という話をしてみて結構いろんな発見があって楽しかった、好奇心がそこでいろいろ広がっていったというんですね。そこで是非今度、成田空港はどうなんだろうかということで成田空港に行こうという計画が出来上がったとのことです。それに対して教師のほうで、子供たちの本来の目的や現在の活動の意味を問う中で、もともとは日本人の“おもてなし”ということをしてやっていたわけですから、本来の日本人の“おもてなし”というテーマを掲げている以上、そっちに戻ったほうがいいんじゃないかというふうに先生方は子供たちに投げかけたというんですね。

結果として子供たちは成田空港に行くというプロジェクトの変更をせずに、外国人観光客が集まる日本の観光地で本来のもともあった問いを掘り上げていくことにしたという実践例です。

これについて教師が後に、これも振り返りの中でなんですけれども、当初の子供たちの選択、つまり羽田空港に行ったので次は成田空港に行きたいという、この子供たちの選択を後押しすることもできたのではないかという振り返りがされています。それによって逆に活動が広がって意味が深まるということが生まれたかもしれないからだと言っていて、ですから先ほどの釣りから化石になったという例とは違って、この羽田空港の例は、子供たちが“おもてなし”をテーマにしてやったけれども、羽田空港に行ったら関心がちょっと広がって次は成田空港というふうに思っていたものを、教師が思いとどまらせてもともとの“おもてなし”というテーマに戻したという例なんです。けれども、むしろこっちは当初の子供たちの軌道からそれていく発想を後押しすることもできたんじゃないかっていうような、そういう振り返りをしているという例です。

そこで、あらわれ方は違うんですけども共通しているのは、今日の授業のテーマにもなっている軌道からそれる、本来の活動の目標や目的ということからそれていくことで、子供たちの関心がより深まり広がっていく、先ほどの戸倉美都子さんの話でいうと、デパートで最初は買いたいものがあったんだけど、デパートをいろいろ探検しているうちにいろんなものが見えてきて目移りして、しまいには何をかうのか分からなくなっていくみたいな、そういう例があるわけです。それもそうですけども、探求というのは答えを1つに絞る活動ではないという、むしろ問いを深めていく活動なので、そこをポイントにした子供たちの探究活動という、これを重要視することが必要だということ。これはお茶の水の附属小の現在の研究の中で共有されている達成点になります。

### 3. ツリー型からリゾーム型へ

こういった軌道からそれていくという話、これを象徴的に言うとツリー型からリゾーム型への転換というふうに私は名づけたと思っています。

ツリーとリゾームというのはフランスの哲学者のドゥルーズという人とガタリという人がもともと考えた考え方で、左側が木ですね、ツリーで、右側がリゾームなんですけれども、垂直に縦になっていて、目的があって結果があるというのが左側の木ですね、ツリーです。で、リゾームというのは目的も結果もなく、横にただ単にずらっ、だだっ広がっていくというイメージ、これがリゾームです。

そこで、ドゥルーズとガタリによれば、リゾームには始まりも終点もない、いつも中間、物の間がある間奏曲なんだと。それに対してツリーというのは血統のようなものであるといっています。

そこで、リゾームというのは同盟のようなものであると。ツリーというのは何々であるという自分のアイデンティティーというのを押しつける存在だけれども、リゾームというのは何々と何々と何々というふうに横でつながって何々というふうに横でつながっていくということによって何々であるというものに揺さぶりをかけて、それに根こそぎ転換していくという、そういうことをやるのが重要なんだと。どこに行くのか、どこから出発するのか、結局のところ何が言いたいのかということがそこでは意味をなさないという。

これも最近の例で話題になったのは、テニスの大坂なおみ選手がいろいろなところで書いている文章の中で、彼女自身が言っていることですが、自分は日本人である、あるいは自分は黒人であるとか自分はアジア人であるという、そういう自分が何々であるというふうに人は自分のことを、アイデンティティーを押しつけてくるけれども、自分自身に言わせれば、自分は日本人でもあるしアメリカ人でもあるし黒人でもあるんだ。ですからそれはある特定のアイデンティティーというものに自分自身が同定されるということにすごく違和感があるということです。大坂選手がいろいろなところで文章により表明しています。例えばそのようなことともこのツリーとリゾームの比喻というのは対応しておりまして、ツリーというのはある特定のアイデンティティーというもの、あるいは結果というものに向けて人々を同定させていくような方向性を持つものであるのに対して、リゾームというのはそれを揺さぶって横でつないでいくものなんだという考え方ですね。

そこで、これを教育に当てはめて考えていきますと、ツリーとしての教育というのは、教育の出口である結果を重要視する、学習の成果を数値化して評価することで人材の選別を行う中央集権的な、あるいはこのスライドの表題にも書いていますが、垂直統合的な教育の構造を表している。

これに対してリゾームとしての教育というのは中間地点にとどまる、あるいは出口のない、答えのない問いと向き合う子供たちの探究活動をベースにしており、中央集権的、垂直統合的な知のヒエラルキーの構造をよりローカルで分権的な、このスライドの表題でいうと自律分散的な、そういう知の構造でと組み替えていく論理を包含している。

先ほどのカリキュラム・イノベーションのところで描いた、左側のアカデミズムを起点として上から下に下りていくというのはまさにツリー型の学習指導要領の構造なわけですが、それをカリキュラム・イノベーションによって社会に開かれた教育課程にしていくということは、右側のリゾーム型の自律分散型のカリキュラムの構造にしていくということにまさに対応しています。

それから学習の形でいいますと、1つの正解に対して突き進んでいく、問題を解くという、そういうタイプの教育はツリーとしての教育に対応するのに対して、問題を考える、探究的な答えが1つではない問題に対して向き合うという教育はリゾーム型の教育、先ほどのお茶の水女子大の附属小学校のプロジェクト学習の例でいいますと、当初は釣りをテーマにしていたのが化石の採取のほうにテーマが変わっていく、あるいは日本人のおもてなしをテーマにして羽田空港に行ったけれども成田空港にも行きたくなったので成田空港にも行くようにしようという、そういう形で学びの軌道がどんどんずれていくという、そういうことを促進していくような、そういう学習の構造が重要なんじゃないかということです。

レッジョ・エミリアというイタリアにある都市があるんですけども、そのレッジョ・エミリア市の乳幼児教育、保育園と幼稚園ですね、レッジョ・エミリア市の乳幼児教育の中で行われている子供たちの学習活動というものを事例に取り上げながら、リゾーム型の教育、軌道からそれる子供の学びということが検討されていますので、そちらのほうもぜひ御参照いただければというふうに思います。

主権者教育との関係では、これは私自身がやった例なんですけれども、私自身、主権者教育との関係で幾つかの学校や、あるいは町に出かけて行って、主には高校生ですけども、中学生や高校生と政治の問題について議論するというのをやっています。これはその中の一例で、宮城県の大崎市の吉野作造記念館というところで、大崎市内の4つの高校から19人の高校生が集まってきて、一緒に政治の問題を考えるというセミナーをやったときの報道で、地元の新聞が取材をして報道をして記事にしてくださったものがここに書かれてある内容です。

そこで、生徒を4つのグループに分けて大崎市の市長選があったというふうに想定したときに、もし自分がその市長選の政策責任者になったらどういう政策を出すかということをそれぞれのグループで話し合っただけで提案してもらうということをやりました。当時、大崎市では焼却処理方針を示している原発事故に、福島第一原発の事故に伴う農業系の汚染廃棄物の処理方法をめぐって大崎市の中ではちよっと議論があったということがあったので、そういうようなことをめぐって自



レッジョ・エミリア・アプローチ

ことがテーマとしては出てきました。分が市長選の政策責任者だったらどうい  
う政策にするかということを経験したというようなほかにも医療費の無料化とか公  
共交通網の充実とか、そういうようなテーマについて話し合いをしまして、そこ  
で、その参加者の一人が、政策を考えるのは難しいけれどもいろんな人と話し合  
うことでたくさんアイデアが出てきた、そこでは、政治を考えるいい機会になっ  
たのでぜひ投票にも行ってみたいというふうな感想を述べています。

こういう問題も、市長選の政策責任者になったときにどうい政策を自分だっ  
たら出すかというのは、これは正解が1つとは限らない問題なわけですね。そ  
うい問題についてみんなで考えて意見を出し合うことで一つの提案をしていく  
と、それは当初思い描いていた軌道とは別の方向に行く可能性もある、その意味  
でツリー型ではなくてリゾーム型の議論に当然なっていくわけで、そういうこと  
も積極的に認めながら議論をしていくということができるということです。

#### **4. 教育研究から探究研究の時代へ**

最後に、こういった探求を重視する教育ということが高大接続改革という冒頭  
でお話した話との関係でいうとどういう意味があるのかということを経、最後にお  
話をしてまとめて代えていきたいと思ひます。

ツリーという垂直統合型のツリーとしての教育というのが今までの高大接続の  
考え方だったわけですが、それは普遍的な真理というのがあって、大学のよ  
うな研究機関、高等教育機関がそれを研究して、知として、知識として産出して  
いく。それが学習指導要領となって初等、中等、乳幼児教育というふうに、中  
等、初等、乳児教育にだんだん下りていくという、そういう垂直型の構造を従来  
取っていたわけですが、今日考えてきたこの探究型の教育、リゾームとしての  
教育というのはむしろ市民としての子供が乳幼児から探究活動を行うことで  
す。従って、乳幼児も市民なんだという考え方がイタリアのレッジョ・エミリア  
なんかではスローガンの的に言われているわけす。つまり乳幼児も物を考えて探  
究活動を行っていくという意味では立派な一市民なんだという、そういう考え方  
に立脚して、そういう横につながっていく、それが初等中等教育における、例え  
ばお茶大附属小で行われているような子供のための哲学教育とか、そういうもの  
もその一つだと思ひますけれども、初等中等教育における探究活動、そして主権  
者教育やシティズンシップ教育ともリンクしながら、これまでのツリー型の知識  
の体系を揺さぶっていく、突き崩していく、それがこれまでの学校の階梯の組替  
えにもつながる射程を含んでおりまして、だからこそ大学入試センター試験の廃  
止ということが現在議論になっているわけで、これについては今もいろいろな、

それこそ賛否両論が渦巻いていて政治問題にもなっておりますけれども、ただもう大学入試センター試験そのものが廃止されることは決まっておりますの、その後どういう方向になっていくのかということはまだこれからちょっと予断を許さない面もあって不透明な部分もありますが、ただ少なくとも方向性としては高大接続改革がこれから進んでいって、これまでのツリー型の教育の構造が変わっていく可能性があるということを踏まえておく必要があると思います。

それをより歴史的な視点で見えますと、教育と研究が結びついていくという時代になっているということですね。明治から戦前までの時代というのは教育勅語に象徴されるような教育と学問が区別されている時代だと言われていて、初等教育までは教育勅語が教えられるけれども、大学に入ると教育勅語ではなくて天皇機関説が教えられるという、そういう一般の国民が教わる教育と大学で研究される学問というのは違うんだと。大学で研究される学問というのは一部の人間だけが知っておけばいいことであって、一般の国民は知らなくていいことがたくさんあるので、だから一般の国民は初等教育で教育勅語を中心にした教育を受ける。だけど学問は教育とは別なので、学問は学問で、学問する資格のある人だけが、一部の人間だけが学問は大学で行う、帝国大学のような大学で行う。そこでは天皇制についても天皇機関説のような学説、こういったものも憲法で学ぶという、そういう、まあある意味二枚舌なんですけど、教育と学問というのは区別されていた時代というのが長らくあったわけですけども、戦後1945年以降、民主化されて、そういう教育と学問の区別が撤廃され、なくなりました。

こそで、大学で研究されている学問が全て国民に対して開かれたものとして初等中等教育学校で教えられるということになりました。しかしながら、教育と学問という区別はなくなったんですけども、教育と研究の分離というのは相変わらず続いておりまして、初等中等教育までは教育する場所であって、研究というのは大学になってから行う場所なんだという、こういう考え方のもとで高大分断が進んできていたと。

受験というのを介在させて、大学に入ってから研究、だけど初等中等教育までは受験勉強という形で来た、これが戦後の2019年ぐらいまでの在り方です。

それに対してこれからの時代の探求の時代というのは、研究と教育をより実体的に結びつけていく時代です。探求というものを、もう既に幼児教育の段階から探求というのは始まっていて、探求が最終的には研究になっていくという。探求的な視点を持った乳幼児期から中等教育までの教育が高等教育における研究の変革を促していく。その担い手として研究的なマインドを持った児童生徒を育てることがこれからの乳幼児教育から中等教育までの初等中等教育においては



期待されているという。これがアクティブ・ラーニングの時代の探求を中心とした新しいカリキュラム・イノベーションの世界であるということです。

現実にはこういう変革がうまくいくのかどうかということは、ひとえに初等中等教育の担い手である先生方の実践にかかっているわけなので、初等中等教育までは教育で大学からが研究だというこの分断を取り払って、探究的な視点を持った乳幼児教育から中等教育までの教育が高等教育の研究に接続していく。

そこで、ただ単に接続していくだけではなくて、高等教育における学問の在り方そのものを変革していくような主体というのが初等中等教育の段階から育成されていくような、そういう方向性がこれからの教育改革の中では求められているということがここで重要になっていくということだということを確認させていただきたいというふうに思います。

(文責：久世)